

芝草ものがたり

逆境にめげず明日
を信じて生きぬ
いた人間記録

〈シリーズ第六巻〉

- 山下 楠太郎 (山下釣漁具製作所社長)
波多 栄吉 (波多製作所会長)
広田 武夫 (北一商店社長)
菊池 利男 (菊池襖紙工場社長)
城田 正男 (那須製紙社長)
飯室 豊三郎 (球技ボールのバイオニア)
飯室 至 (タチカラ株式会社社長)
鈴木 健次 (社寺建築家)

反

骨

鈴木健次
社寺建築家

小便をかけられた名人大工

鈴木健次は、明治三十二年八月二十二日、福島県郡山の在に生まれた。

家は農家であったが、郡山大河内藩の家老職を勤めた鈴木十郎右衛門の末裔であり、その血筋と暮しむきの点で村では有数の家柄であった。いわば村での有力者のひとりであり、土地柄もあって、父は百姓仕事よりも政治運動に夢中になっていた。土地柄というのは明治の年間を通じて、東北一帯は民権運動が盛んであったが、なかでも福島県は熾烈を極め、薩長藩閥政府の派遣した県知事と記銀的な抗争をやっている。健次の父もそういう雰囲気と巻込まれたのであろう。

その父の権威に屈せず、おのれが正しいと信じたところを貫く反骨の精神——健次が父から受継いだものは、その血筋であった。

少年の健次は、理由なくして威張るものが我慢ならなかった。かれは学校でも村でも、いわゆるボスの風下に立つことができず、そういうものが現われるとぶつかっていった。第三者から見ると、それは腕白大将である。

その腕白大将の健次が、四年生のある日、村にはいつてきた人力車をみた。大正のはじめである。郡山のような町では人力車はもう珍しくなかったが、健次の村では稀有のことであった。

「誰れだろう」

健次ばかりでなく、村びとたちは外へ出て、人力車の主をみた。中年の恰幅のいい男であるが、洋

服を着た役人でも、羽織袴をつけた政治家でもない。

車上の男は周囲にひとのいないような顔をして、車を停めてあたりを見廻しはじめた。いかにも尊大であり、傍若無人にみえた。健次は、男のそんな態度をみるとムラムラとしてきた。自分の村が侮辱されたように感じたのである。かれはつかつかと人力車のそばに寄ると、泥んこになっている着物の前をまくって小さなチンポコを出し、車輪を目がけて放った。まわりに集まっていた大人たちは、あッと声を呑み、どういうことになるかと顔いろをかえた。子供とはいえ相手がその非礼に怒ったらどうなるか……。

が、車上の男は健次のそれを見ると、

「おい、坊主、なにをするか」

と、弾かれたように大声で笑い、振りむいて怒りかけた人力車夫を制した。

「面白い子供だ。気骨がある。どこの子供だ」

男は健次や周囲にいる村びとたちに訪ね、翌る日になると、健次の家に訪ねてきた。みどころのある少年だから東京に連れて行って勉強させ、自分の後継者にしたいというのであった。その男というのが当時の社寺建築では第一人者といわれた中村善五郎である。善五郎は材木を買いにたまたま郡山にきて、健次という逸材を発見したのである。

とはいえ健次はまだ子供である。社寺建築がどんなものか、中村善五郎がどんな人物かも知らない。善五郎が社寺建築では名人といわれた尾張徳川のお抱え建築家伊藤平左衛門の一番弟子であったことなどを知ったのは、その後のことである。ただ健次は東京で学校にやってやるという、善五郎の

言葉に釣られた。当時の小学校は尋常科が四年、高等科が二年で、尋常科四年で卒業、そのまま社会に出るのが多かった。中学校にゆくのは村でひとりあるかなしかである。

むろん健次の両親も賛成し、健次は尋常科四年を卒業すると、東京の善五郎のところに行った。が、善五郎は約束とちがって学校にやってくれず、健次を専ら内弟子として使った。

中村善五郎にしても違約のつもりはなかったたのであろうが、当時、かれは鶴見の総持寺を建てる仕事を請負っていて、職人だけでも百五十人からを投入しており、猫の手も借りた状態であった。それに健次を中学なんかやるより、はやくから仕事を覚えさせた方がいいと考えたのであろう。

総持寺は曹洞宗の大本山として、もとは石川県能登にあったものを、焼失やらその他の宗門の内部の事情もあって明治三十九年、現在の鶴見に移すことになったものである。それ以来塔、堂の建築がはじまり、健次が善五郎のところに来た当時は、その建築の最盛期でもあった。なにしろ仏殿をはじめ伝灯院、放光堂、衆寮、常照殿、大庫裏、待鳳館、紫雲台、群雲閣、役寮堂、勅使門、大鐘堂、三松閣、廻廊などと多くの塔堂をつくるのである。しかも仏殿大雄宝殿ひとつにしても、総松、入母屋、二重屋根、組物二手先、方十二間といったもので、そのひとつを建てるにしても容易なものではなかった。待鳳館は二重の流れ破風、百八十八坪の建物であり。大庫裏は二階建て梁間十二間、桁行十六間、二階の広間には全く柱をもちいないという技術的にもむつかしいものである。

健次は鶴見の総持寺の作業場に泊りこんだ。が、仕事といえれば飯炊きであった。一斗釜で五十人分の飯を炊くのである。それに味噌汁もつくらねばならなかった。

その飯の支度、あとかたづけの合間に、カンナの練習である。横カンナ三年、縦カンナ三年といわ



鈴木健次の建築

れるやつで、大工の基本になるものである。が、善五郎はむろんのこと、兄弟子や職人などが教えてくれるわけではない。

「おい、ちょっとこれをやっつけ」

といわれて、その出来ぐわいが悪いと、「馬鹿野郎」と叱られたり、頭を叩かれたりする。それが当時の教育法であった。

だいいち仕事らしい仕事はさせてもらえない。あれなら自分にもできると思っただけで手を出さうものなら生意気だと怒鳴られるのである。それも仕事場に通うようになって半年や一年のことではない。上のものは、いつまでも健次を子供扱いにする。健次は仕事をしたくうずうずした。のちになつて考えると健次はそれがよかつたと思う。こちらの仕事への意欲が燃え、かあつとしたところではじめて仕事らしい仕事を与えられるのだ。そうならば一層意気込んでいい仕事ができるのである。戦後はそれが逆で、若いものが仕事への意欲を燃さないうちに、それやれとばかりに仕事を押しつける。

しかし、善五郎は健次をただの職人にするつもりはなかった。社寺大工として自分の後継者にするのが最初からの考えである。そのため健次には、

「図面を勉強しろ」

と、機会あるたびにいった。設計図ができなければ駄目だというのである。

健次も総持寺の作業場から戻ると、夜は古い図面などをみて、それを写すことで勉強した。この場合も兄弟子たちは教えてくれようとしなかつた。自得以外にない。

ときには師の善五郎の書いた図面をそつとみたりする。先輩の技術を盗むわけだが、それができないでは一人前にはなれなかった。

と云つて、善五郎は健次を放任していたのではない。手をとつて教えはしなかったが、健次にはあれこれと仕事をいいつけるようになった。だいたい総持寺のような大きな仕事で、職人が百人を越えると、カンナはカンナ、ノミはノミと仕事が専門的になる。善五郎は、そのどれをも健次にやらせたのだった。そして、仕事をやらせるといふのが、善五郎の教育法であり、自分でコツを覚えるといふわけである。

絶望に生きる勇氣

健次が十六歳のときだった。総持寺内にあるいくつかの門のひとつに額をかかげることになり、その額の図面をひくよう善五郎からいわれた。善五郎自身図面を書くが、健次にも書いてみるというわけである。

それは複雑な組合せになる額であった。健次はいわれたまま図面を書いて、善五郎のところに差出すと、

「違うな。これじゃ額はでせん」

と、自分の設計図によつて額をつくらせた。ところが、これがうまくない。そこで試みに健次の図面をやつてみると、びったり納まった。

「おれのほうが間違っていた。しかし、どうしてこれがわかった」

善五郎は卒直に自分の誤りを認め、健次の腕に舌を巻いた。三十にならなければ一人前の図面はひけないといわれたのに、健次は十六歳の若さでやったのである。もっともこれには秘密があった。健次は古い額をみて参考にしたのである。それにしてもかれの若さでは、ふつうなら出来ないことだった。

それ以来、善五郎の健次をみる目がちがった。これこそおれの後継者になれるという信頼を寄せるようになったのである。

健次は次々と善五郎から仕事を託されるようになった。またそれを立派にやりとげて善五郎の期待に応えた。

それから数年後の徴兵検査のころには、健次はもう一人前の社寺大工になっていた。そうなると健次は、つい独立したくなつた。そして、二十三歳のときつると結婚し、横須賀に新居を構えると同時に、善五郎のところを出た。腕は出来たし、結婚はしたで、ひとり立ちがしたくなつたのだが、これも人間形成の上で当然の経路であらう。

が、いくら腕があつても、数え年二十二、三歳ではやはり無理だった。健次は翌年には善五郎のところに戻り、再び総持寺で働いた。そして、一年ほどすると、やはりいちど親方のところを出て、世間の風に当つた健次である。善五郎のところ落ちつけなかつたし、善五郎がなにかというとなんと健次を立てて大事にすることで、周囲の風当りもあつて、結局また出ることになつた。

そのころ箱根別院といわれた最乗寺の建築を兄弟子が受注していたので、健次はその一括下請をす

ることになった。健次の腕ならどこでも通用したのである。そこで健次が手がけたのが六角の光明堂である。六角とか八角というのは古い時代には珍しくないものだが、当時では珍しいものであった。これは寺側でも喜ばれたが、周囲の評判もよく、健次も自信をもった。

とはいえ、そういう仕事が続々にあるわけではなく、健次はその後、大きく躓いた。伊豆伊東の伊東館といえ、伊東では一流の温泉旅館であるが、健次は知人から紹介されて、その建築をするこゝたになった。なにしろ相手は大旅館であり、経営者は政友会の支部長などをしている人物である。すっかり信用して工事をはじめたところ、上棟式をすませても一銭の支払いもなく、そのまま伊東館は破産してしまった。健次は、それまで自分の顔で材木屋、金物屋から買い、職人にも自腹を切った上、借金までして払ってきたのである。そういうあちこちの借金が総計すると二万八千円にも及んだ。一万あれば銀行の利子で遊んで食えるといわれた当時の二万八千円である。しかも、健次はまだ二十六歳になったばかりの青年であった。かれには二万八千円の借金はどうしようもない重荷であった。返済の目算どころではない。

「おれの生涯はこれで終った」

と、健次は思った。うかつに相手を信用したことがいけなかった。伊東で一流の旅館、政友会の支部長という地方名士——そんなものに幻惑された若さが悔まれた。が、いくら悔んでも借金が消えるわけではない。

健次は三溪園にいった。ひとり消えるように海に投じて死のうと思ったのだ。

生きていることが苦しく、死ねば楽になれるだろう……。

その日、夕刻になってから崖の上に立った健次は、次第に昏くなってゆく海をみつめていた。飛込めば絶対にといいほど助かる見込みのないところである。健次は、息を殺すようにして、その墨いろの海をみつめていたが、気持のどこかに強くひっかかるものがあった。二歩三歩、崖の端にむかって歩けばわけはないが、それが出来ないものである。そのうちに周囲もすっかり暗く、星がひとつふたつ瞬きはじめると、体内に不思議な力が湧いて、

「そうだ。ここで死んだつもりになって働こう。そうすればいつか借金を返せる」

と、ひとり言をいった。

その翌る日から健次は借金をした先きを一軒一軒廻って謝まり、必ず返すことを誓った。時は関東大震災のあとである。東京の市内には家がどんどん建ち、そのころから目立ってアパートも建った。健次はそんなのを引受けて、ひとの二倍も三倍も働いたが、しかし、計算どおりにゆかないのが金である。いくらかずつは返済できたが、二万八千円という大金である。いつになったら全部返せるかと途方にくれることもあった。

そのまま数年がすぎてしまった。健次もいつか三十歳を越えた。そのときになって渋谷の福昌寺の本堂建設を依頼されたのである。健次には本来の仕事である。それがいままでなかったのは、腕はあっても、やはり二十代の若さでは大きな仕事は頼まれなかったのである。もちろん健次が伊東館の失敗のあと、まじめにやってきたことも信用を得た。

この福昌寺本堂には大工を二十五、六人も雇い、五年の歳月をかけた。そして、このおかげで二万八千円の借金も払い、なお残るものがあった。

いったいに社寺建築は、材料費が五割、四割が人件費で、あとの一割が利益だが、それから事務費、雑費を差引くと、実際に残るものはわずかである。それでもなお二万八千円借金が返せて残ったのは、やはり本堂の建築のような大きな仕事なればこそであろう。

いずれにしても福昌寺本堂は、健次がひとりで請負った仕事としては、これまでの最高のものであった。その出来ばえも好評であった。駒沢大学の学長だった福昌寺の住職が、大へん喜んで、三重ねの金盃と紋つきをそえて、お礼として金一封を包んでくれたが、その中味は六百円もあった。十分に建築費ももらった上で、なおこれだけの金をお礼としてもらったのだ。こんなことも異例であった。

以来、健次の名は社寺建築界で知られ、つぎつぎと注文がくるようになった。かれは文字どおり一人前の社寺建築家となったのである。

激流

昭和初年の不況はいまなお記憶のひとが多い。火が消えたようだというが、世のなか全体が暗く活気は失われていた。カフェが群立し、ジャズが流行しはじめたが、それも当時の自棄的な気持を反映したものであった。

工場の閉鎖、失業者の氾濫……。

農村もひどかった。米がだぶついて売り場がないのだ。

だが、世のなかが暗く、希望の灯がうすれると、ひとびとは神仏のことに熱心になるのであろう

か。苦しいときの神だのみということわざもある。不況といいながらあちこちで寺の建築や修理があった。健次は結構いそがしかった。不況知らずである。

そのうち満州事変で、景気もすこしずつ上向きになり、昭和十二年夏、支那事変に突入すると、むしろ戦時景気が到来した。そのころには健次はすっかり地盤も固めていた。もう押しも押されもしない一流の社寺建築家である。

ただ困ったのは若い弟子たちが、つぎつぎ召集されていってしまうことである。寺の建築のように、いちどに何十人もという大工を投入しなければできないものには、この戦争は痛手であった。支那事変がはじまってから大島町に七十坪の羅漢寺をつくったのが、戦前の仕事の最後である。

むろん資材も乏しくなり、戦時下の不急不用のものとして、寺の建築などもできなくなった。そのうちに大東亜戦争であり、やがて空襲である。健次はこのため渋谷の福昌寺をはじめ、東京市内に建てた多くの寺を焼いてしまった。三百年や五百年の風雪には絶対に大丈夫だと、自信をもって建てたものも、兵火にはかなわなかったのである。

空襲が激しくなると、健次は福島県の平に疎開して、そこで終戦を迎えたのだが、焼野原になった東京にぼつぼつ家が建ちはじめ、いっばんの大工が忙しくなってきた。かれは平から動かなかった。戦時中に社寺の建築ができなくなると、健次は海軍にいた従兄の関係で海軍の倉庫づくりをやったことがある。寺の大講堂、大庫裏を手がけてきた健次には甚だ物足りない仕事であったが、明治生まれの健次である。お国のためという言葉のまえには、一切の私情がなかった。かれは海軍の倉庫づくり

に精を出した。だが、それには戦時下の非常時だからこそで、戦後となると、いっばんの住宅などがける気持はなくなっていた。借金を返したいばかりに、ふつうの住宅やアパートまでやったこともあるが、それは昔のことで、戦後の健次は、もう自分の本来の社寺の仕事以外にはしたくなかった。もうそういう年齢にもなっていた。

さいわいに戦後も二年目、三年目になると、あちこちで寺の再建がはじまった。寺はどこも土地をもっている。それを売るとなると、いろいろ面倒な手続きがあるが、権利金をとって貸す分には簡単であるし、東京の町でそれをやっていないところはまずない。しかも戦後の土地の値上りで、その権利金も高くなり、寺の大きな財源になった。そこで焼失した本堂だけでも再建しようということになったのであろう。平にいる健次のところへ鶴見の宝泉寺から話があったのをはじめ、いくつかの寺から口がかかった。

健次はようやく上京の気持が動いた。そして、宝泉寺を最初に、杉並の龍光寺、浅草の清雄寺と寺を建てた。

ずいぶんと起伏のあった半生である。一時は死まで決したこともあるし、ころならずの仕事もしたこともある。が、戦後の健次はもう不動のものになっていた。社寺建築家としては第一人者になっていたのである。

名人氣質

鈴木健次は、天才のようにいわれる。事実、かれのこれまでの歩みは、曲折はあるにしろ、社寺建築の世界で光芸芒を放ってきた。焼失はしたが、福昌寺の建物など、残っていれば後世に語りつたえられるものであろう。

それは健次の純粹さのせいでもあった。

かれは一本の柱といえども、間にあわせのものを許さない。材木屋に電話なり、書類だけで注文するなど以ってのほかで、いちいち原木の立つ山地まで出かけてゆく。健次の仕事はそこからはじまるのである。

弘法は筆を選ばずというが、本来の書家は筆や紙、墨にやかましい。材料や道具には惜しみない労力と金を注ぐのである。

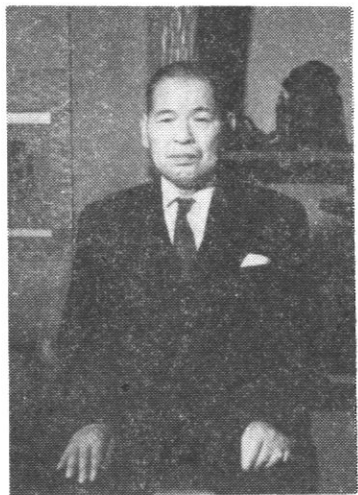
それにふつうの大工なら見積書といえ、二、三枚の紙に要点だけを書く。それでも通用しているといえ、いえるが、健次の場合は何十枚にもなった。寺と一般住宅のちがいはあるが、かれは一本の釘まで計算した。つまり本堂なら本堂の隅々にまで気を配り、すっかりそれが頭にはいるまでは仕事を手につけないのである。いい加減な目分量などということは我慢できないのである。

そして、そのひとつひとつが、健次の場合は創作であった。

寺は信仰につらなるものである。その形に接したものが、理由はともかく、まず雰囲気、仏の有難



師・中村善五郎



鈴木健次



つる夫人

さを感じなければならぬ。なにごとのおわしますかは知らねどもといった。あの雰囲気である。それが宗派によってちがう。そのちがいを生かして造形しなければならぬ。そして、同じ宗派でも寺となると同じ形ではなく、それぞれの個性をもたせる必要がある。

だから設計が大変であった。とくに若葉（欄間などのすかし彫り）の図柄となると、建築家の個性が出るし、飾りとして一番目立つだけに、設計するものの苦心のいるところである。

健次は、その若葉の図柄を書く段になると、真冬でも火の気のない一室に閉籠って、何日もふとんを敷かせなかった。畳に敷いた紙にむかい、疲れるとそのまま横になった。そして、頭を休めるとまた起きて完成まで三日でも四日でも頑張るのである。だいたい寒いからといって縮こまっているのが嫌いであった。

真冬に寺の工事をしたときのことである。大工たちは休み時間になると、たき火をしてそのまわりに集まり、いつまでも動こうとしない。それをみた健次は、黙って真裸になると、寺の池に飛込み、行水でもするようにからだをゴシゴシやってから、

「おおい、いい気持だぞ。おまえたちもやらんか」

と、上がってきた。それをみてたき火にしがみついていた大工たちは忽ちに散り仕事をはじめた。健次の無言の叱責であったが、それと同時に、かれ自身が寒さに負けない気迫の持ち主でもあったのである。

家族のものもそんな健次には手を焼いたこともあるらしい。仕事となると、もうそれに夢中になり、ほかのものが全然目にはいらないのである。

だいいち金銭に無頓着であった。予算にきめられた範囲内で、仕事の量と質を加減するというような器用な真似はできない。いったん仕事にかかる、損得を忘れ、自分の気がすむまでやらないとおさまらないのである。そのために仕事の量としてはずいぶんやりながら、傍らのものがみるほどの収入はなかった。が、そういう健次だけに、職人からは信頼された。戦時中、海軍の倉庫をつくったときには、月に千坪からのものをつくるという突貫工事で、多勢の大工が必要であった。

「問題はその大工だが、集まるかね」

海軍の担当官がきいた。もし集まらなければ、海軍としては大工を徴用で集めるつもりでいたろう。しかし、そうして強制的に集められた大工では、一種のサボタージュで能率があがらない。

「いや、なんとか集めてみましょう」

健次はそう答えて集めにかかると、忽ち必要な大工の数が集まった。

「鈴木の方がやるなら、知らん顔はしておれまい」

大工たちはそういって集まってきたのである。それというのも健次が、自分ではどんなに苦しいときでも、大工への賃金だけは必ず払い、私的にもなかと面倒をみてきたからにほかならない。

材料や道具を大切にしてきた健次は、同時に人間をも大事にしてきたのである。またそれでなければ社寺の建築はできないというのが、かれの信条でもあった。

技術の面でも健次は非凡なものを發揮した。あるとき坐禪堂の建築をたのまれて、その設計をしたところ、寺側から、

「こんな坐禅堂はみたことがない。違っているのではないでしょうか」と、訂正を求めてきた。

「いや、そんなはずはない。これが坐禅堂としては古来からの伝統のもので、あなた方がみられたのはすでに型の崩れたものでしょう」

「そうでしょうか」

寺のほうでもそれほど自信がなかったのであろう。いったん引退って、大学のそのほうの専門の教授にみせると、この形こそが坐禅堂の本元のものだという折紙がつけられた。寺ではいまさらのように健次の学識・力量に感心して、謝罪しながら、

「ひとつこの通りにお願います」と、いつてきた。

健次にしてみればなんでもないことだった。善五郎の下にいて、総持寺の工事をやったときの坐禅堂の設計をおぼえていたのである。それこそ伝統的な古来のものだった。

容易に権威に屈せず、反抗的な健次であったが、先人から学ぶことには素直だった。能登の古い寺を解体して、他に移す仕事を引受けたとき、健次はその柱や梁に丸や三角、掛印など、いろいろな符号のついているのを見た。その符号を辿ってゆくと、今日の木造建築の理にぴったると合っていることがわかった。しかも、その寺は二百年も前に、名もない社寺大工がやったのである。

「あの当時には、能登のこんな田舎にも、こんな立派な大工がいたのか」
健次はあらためて頭の下がる思いをした。

実際に、木造の社寺は千年もまえから、いくたの建築家によって技術が磨かれ、それが伝統となつて伝えられてきたのである。またそれでなければ、いまも残る大伽藍ができるわけはなかった。そして、その伽藍は、いずれも今日の建築学からいって合理的なものである。

計算もサシガネ一本でやる。原始的といえは原始的であるが、それによる計算は近代の計算尺に劣らない。

健次自身もサシガネ一本で、大伽藍の寸法を割り出し、職人の給料の計算までやるのである。その使い方をおぼえるまでには年期がいった。即製ではできない。が、サシガネによる計算によればこそ、木造の伽藍の美も生まれるのである。

ところがいまはそれを学ぼうという若いものがない。

「このままでは伝統の木造の社寺建築の技術が失われる」と、健次はいう。

「染織なんかの技術のうち伝統的なものは、文化財として国が保護を加えているが、ああいう形にもして社寺建築の技術を保護するか、大学なんかに日本古来の社寺建築に関する部門において伝統の技術を学ばせる必要がある。それ以外にもう手はない」

健次のその言葉の裏には、自分は個人として出来得るかぎりのことをやったが、もう手に負えないという嘆きがひそんでいる。実際、健次はかつて自分が中村善五郎に見い出されたように、後継者をつくろうとして若いひとを手もとにおいて育て、教えてきたが、これという青年が現われなかった。

青年たちは古いものを学ぼうというよりは、新しい目のまえのものにひかれた。だいいち寺そのもの

が、戦後は単なる葬式の場として、民心から離れていった。

健次にとってこれは淋しいことである。

大工道具一つを扱うにしても、急速にその技術が失われている。かつて健次はチョウナの一本をもつて、たいていの仕事をやってのけた。相手の鼻の頭に墨の点を塗り、こちらからチョウナで一振りして、その墨の部分だけを削りとるような離れ技までやってのけた。ひとつましがえは相手の鼻をそぐような危険なことである。健次は、そこまでの修練を積んだ。それは佐々木小次郎のつばめ返しにも比すべきものであろう。

そこまでの修練を健次は若いものに求める気持はないが、電気カンナかなんかで、材質もそれを使用したあとも考えず、簡単に切ったり削ったりしているのをみると情けなくなる。それは千年の技術が失われる光景だからでもある。

と、健次は古いものだけに固執するわけではない。ある新興宗教の本堂をたのまれたときには、その意匠の新しさと、新興宗教のもつ感じにびったりで、ひとを驚かせたこともある。

「古いものを身につけることが、新しいものへの出発になるのだが……」

健次はそういうのである。

しかし、健次のような打算にも、時流にも媚びない建築家というものは、やはり明治人であろう。

もう健次のような建築家は出ないかもしれない。ただかれにとって、せめてものなぐさめは、男の子三人が揃って、この苦難の多い寺社大工の道を継承してくれていることである。

☆本書は、逆境から身を興し、独特の哲学、独自の経営法を駆使して、粒々辛苦、遂に自己の城を築きあげた実業家の人間記録である。

☆明日への夢を抱く青少年にとって、限らないエイ智の宝庫となり、逆境にあえぐ青少年に強烈な勇氣と希望を与える。